協会ニュース　KYOKAI NEWS

■支部運営規程を制定

支部運営には9支部に独自の規程、規則がありましたが、本部規程として制定することが常任理事会（11月15日）で決まりました。12月1日実施で、これまで支部独自の規程、規則は廃止されます。

支部運営では支部理事の定年制が検討されていましたが、現行の支部理事の年齢構成を考え、任期制（2年）とし、再任も可能としました。支部理事は支部理事会の承認を得て支部長が任命します。

また、支部間で差があった支部活動に伴う日当、交通費などの支給額も統一されました。

■会報の見直しを協議

広報委員会（12委員、9支部参加）が12月11日開かれ、協会会報『リビングウイル』の見直し案を協議しました。本部会報と9支部会報を合冊した現会報（A4版、32頁）は2010年から続き、年4回発行しています。見直し案は、発行回数を維持して、減ページをはかる案。各支部ページ（現在は各2頁をそれぞれの支部が編集）をやめて本部版と一体化編集する案で、オールカラー化、編集・デザインの向上をめざすものです。

■ ご遺志と篤志の寄附2件

会員の大山總江さん（千葉県）から9月、「会員だった夫の故大山勝夫様のご遺志」として200万円が協会に寄付されました。また10月、愛知県の会員様（匿名希望）より篤志として500万円の寄付がありました。

あとがき

○…たまたま見た東宝映画「駅 STATION」（降旗康男監督、1981年）が忘れられず、舞台となった北海道北部の日本海側のまち、増毛を訪ねたことがある。根雪になる雪が降り始めたころで、JR留萌駅から沿岸を走る鉄路で町へ向かった。車窓からの荒れる海は映画シーンさながらで、小さな終着駅のわびしさも染みた。はるばるやってきたわが身といえば、気分はほとんど“健さん”だったから、いま思うとあまりにもおかし過ぎる。

○…俳優・高倉健さんの死を惜しみ、業績をしのぶニュースがあふれた。「不器用で、誠実な男」を演じてファンを魅了したが、「駅～」ではオリンピック射撃候補選手にもなった北海道警のスナイパー刑事役。正月休みにふるさとへの船便を待つ増毛で、倍賞千恵子が1人でやっている飲み屋に立ち寄り…、という粗筋は別の機会に。思い返すと、ファンでもない中年男を北の旅へ向かわせたのは「自分、不器用ですから」が持つ魔力だった、というしかない。

○…さて、健さんの死の詳細は知る由もない。5年前に前立腺がん手術を受けて治癒したが、あらたに悪性リンパ腫が見つかり、次第に体調が悪化したという。「俺は、ひっそりと誰にも知られず逝きたい」と病院ベッドに寄り添う友人に告げた（週刊文春）という報道もあり、訃報は葬儀もすませた8日後に公表された。私たちが推し量れるのは、健さんは「自分らしい死」を全うできたらしい、ということだけ。抜け目なさがはびこる世にあって、せめて最期だけは無器用でも自分らしくありたいと願っている。（か）

会報 リビング・ウイル 第156号
2015（平成27）年1月1日発行
（1月1日、4月1日、7月1日、10月1日発行）

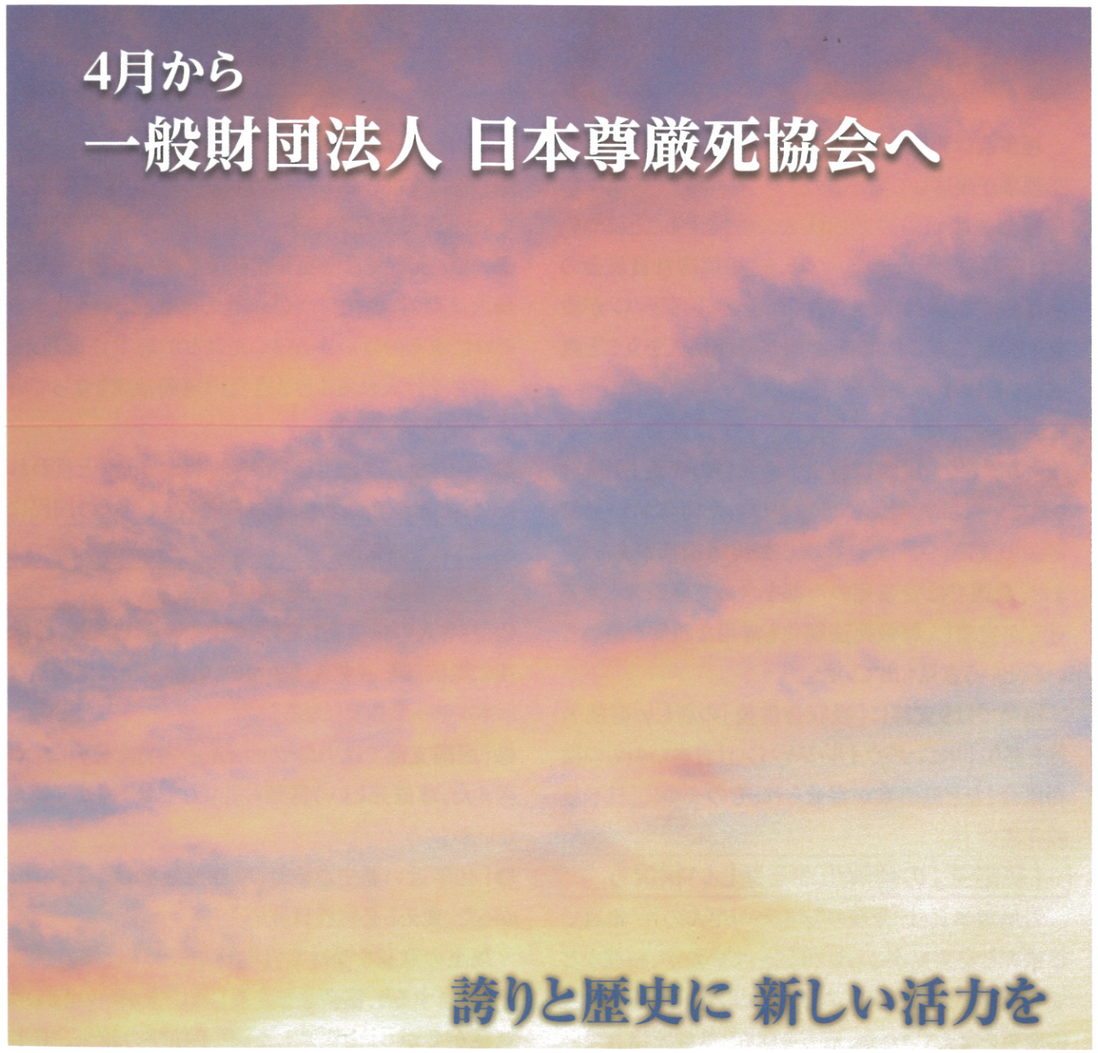
発行所　一般社団法人 日本尊厳死協会
発行人　岩尾　總一郎

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-8 太陽館ビル501
電　　話 03-3818-6563
F　A　X 03-3818-6562
メ　ー　ル info@songenshi-kyokai.com
ホームページ http://www.songenshi-kyokai.com
郵便振替口座 東京 00130-6-16468

一般社団法人 日本尊厳死協会 会報（季刊）ⓒ

リビング・ウイル

JAPAN SOCIETY FOR DYING WITH DIGNITY NEWSLETTER　2015年（平成27年）1月1日発行　No.156



～協会名を審議した理事会の模様は2頁に

協会の会員は12万1275人です（12月10日現在）

主な内容

●メイナードさんの死……3頁
●新春に寄せて……4～5頁
●新DVD制作進む……7頁
●LW研究会 地方会……8頁
●本棚遊泳……10頁
●支部のページ……12～31頁

財団名は引き続き「日本尊厳死協会」へ

～理事会異議なく～

一般社団法人・日本尊厳死協会の理事会（写真）が11月15日開かれ、新しい財団法人（10月設立）との「吸収合併契約決議」を承認し、「吸収合併時の法人名称」はこれまでの名称を継承し、「財団法人・日本尊厳死協会」とすることを異議なく承認した。いずれも臨時社員総会（12月19日開催予定）の議を経て最終手続きとなるが、4月1日から（財）日本尊厳死協会が現在の社団法人協会の事業など一切を継承する。

理事会は東京・本郷の協会事務局で24理事のうち23理事が出席して開かれた。

協会組織が一般財団法人に転換することについては直接移行ができないため、9月の臨時社員総会の承認を得て、（財）リビング・ウイル トラスト ジャパンが設立された。この4月には新財団が社団法人を丸ごと吸収して組織統合する形になる。

組織統合後の財団名称については当初、協会が抱える課題を切り開くために「協会名の変更」が検討されていた。「死」という用語がついた団体名が会員増強の支障になっているのではという指摘があった。また、米国では安楽死の一部を含めて尊厳死とする考えが定着し、尊厳死法制化も無用な誤解を招いている、という意見も出ていた。

協会では9支部に「吸収合併後」の新しい財団名称を募り、「リビング・ウイル・ジャパン」「日本いのちの権利協会」など31の案が寄せられ、その一つに「日本尊厳死協会」も。

「尊厳死」の理解広がる新しい状況も

岩尾理事長は「今回の“メイナードさんの死”報道で尊厳死と安楽死がごっちゃになっていたが、続報などでその違いがはっきりした新しい状況も出ている。名称変更を考えてきたが、地方を回ると尊厳死協会でいいとする声が強く残っている」と述べ、意見を求めた。

出席者全員が意見を述べ、幾つか紹介すると―

●「北海道支部では支部役員10人で激論を交わし、変更には大反対。変える場合でも○○○（旧日本尊厳死協会）と入れてほしい」

●「東北支部の講演会でうかがったら、尊厳死協会でいいという意見が強かった」

●「東海支部では変更が前提で名称案が出たが、私個人は反対。歴史をつくってきた尊厳死という言葉をゼロにするのはいかがか。だれもが終末期を迎え、“死”を受け入れることで協会の運動は成り立っている。死を嫌うべきでない」

●「中国地方支部では“トラスト”はおかしいと言われた。尊厳死協会の名称は知名度も高く、多くの国民に認識されている」

歴史重ね、知名度高い協会名

●「日本人の死生観も変わってきている。自然死、尊厳死に抵抗感を示す人は少ない。名称変更には相当なエネルギーが必要になる」

●「四国支部ではリビング・ウイルの名称を使いたいと考えた。尊厳死という言葉も定着しており併せて使えないか」

●「40年近い歴史を重ね、尊厳死運動はここまで広がった。変える必然性は薄い」

以上の意見を受けて岩尾理事長は「皆様の意見をお聞きすると、協会名を変更しない方がいい」という意見が多かったと集約した。挙手採決の結果、“日本尊厳死協会”が異議なく承認された。

なお、（財）リビング・ウイル トラスト ジャパンの理事会も同日開かれ、吸収合併契約決議と吸収合併時の法人名称を日本尊厳死協会とすることを承認した。

誤解なき「尊厳死」で論議の発展を

「メイナードさんの死」がもたらしたもの

10月半ば、そのニュースを知ったとき、一抹の不安を感じた。

脳腫瘍で余命6か月宣告を受けた米国オレゴン州の女性、ブリタニー・メイナードさん（29）が「11月1日に死にます」と“尊厳死”予告をした。オレゴンは、末期患者が医師処方の致死薬飲んで自殺（PAS）する安楽死を州法で認めている。彼女の死の選択をめぐり波紋が広がっているというのだ。

日本では「安楽死」が、なぜ…

予告通り薬を飲んだ「メイナードさんの死」が日本にも伝わると、不安は現実になった。

11月4日の朝刊各紙。「尊厳死宣言、薬飲み実行」（読売新聞）、「脳腫瘍患い『尊厳死』宣言、薬服用死亡」（日本経済新聞）、「決心変えず『尊厳死』」（北海道新聞＝共同通信）など見出しは“尊厳死”オンパレード。

そのなかで朝日新聞が「米女性、予告通り安楽死」とし、「安楽死、尊厳死、日本は区別」と解説していた。またNHKテレビも「安楽死した」と放送した。

米女性 予告通り安楽死

がん、余命半年宣告

米女性「尊厳死」日本にも波紋

安楽死は認められず

「タブー視せず議論を」

ほう助自殺、安楽死のはずの「メイナードさんの死」が“尊厳死”と大きく報道されては影響が心配だ。日本尊厳死協会は「医師による自殺ほう助」を認める団体なのかと誤解されかねない。協会が取り組む尊厳死法制化も〝安楽死法〟と思われたら大いに迷惑。現にそうした攻撃もあるのだから。

マスメディアによって「尊厳死した」「安楽死した」と異なり、各社にも「どちらが本当なのか」という問い合わせが読者や視聴者から数多く届いたという。

日本の人々を惑わせた原因は、ひとことで言えば日米文化の違いである。

安楽死に対する拒否感が強い米国で、その一類型とされるPASの合法化を求める動きが広まり、1997年、全米で初めてオレゴン州で「The Oregon Death with Dignity Act」（オレゴン州尊厳死法）が施行された。

この州法は、直接提案制度に基づく住民投票（1994年）の結果、賛成51%:反対49%の僅差で誕生した。「尊厳死法」というソフトなネーミングが功を奏したといわれた。投票に際し、安楽死推進団体が法律名の用語が人々に与える影響を調査し、「婉曲に表現した方がいい」と作為的に「尊厳死」を使ったとされる。

オレゴン州に続いたワシントン州も「尊厳死法」とし、「医師による自殺ほう助」を尊厳死とする考えが定着した。患者の意思を尊重して延命措置を差し控える「尊厳死」は、米国では「自然死」と理解される。

だから米国ではオレゴン州法の要件と手続きに基づく「死」は「尊厳死」に違いない。しかし、日米の違いに触れず、ただ「尊厳死した」と日本で報道されると、無用の誤解と混乱を招いてしまう。

日米の違い知り、理解深める好機

新聞の見出しなどで大きく「○○死」と載る言葉のイメージは強烈だ。もし妥当でない使われ方だったら、その誤解を払しょくするのも容易でないし、誤った論議につながりかねない。

幸い、マスコミのなかには今回報道を振り返って、日米の違い、言葉遣いの妥当性を検証する動きが出ていると聞いた。リビングウイルに基づく「尊厳死」について誤解や曲解があっては、終末期医療の論議を損なう不幸なことである。「メイナードさんの死」であらためて正しい理解が広まればと願っている。

終末期議論をタブー視しない社会を

理事長
岩尾 總一郎

昨年11月に米国で悪性の脳腫瘍を患ったブリタニー・メイナードさん(29歳)が、カリフォルニアから医師の自殺ほう助を合法化しているオレゴン州に転居し、州法に従って「尊厳死」を遂げたことが大きな話題となりました。

協会本部事務局にも多くの問い合わせの電話がありました。なかでも、会員の皆さまから、「あれは尊厳死ではない、安楽死だ」「協会はなぜ、誤報だと新聞社や報道機関に抗議しないのか」という意見をいただきました。

尊厳死という言葉は海外では異なって用いられています。世界医師会の「患者の権利に関するリスボン宣言」には、「患者は、人間的な終末期ケアを受ける権利を有し、またできる限り尊厳を保ち、かつ安楽に死を迎えるためのあらゆる可能な助力を与えられる権利を有する」と記載されています。したがって、欧米では、尊厳を保ち、かつ安楽に死を迎えるために医師が行う助力(自殺ほう助=安楽死)も、尊厳死という概念に含まれます。オレゴン州法はDeath with Dignity Actで、まさに尊厳死法なのです。

ご承知のように、このような医師の行為は日本では安楽死に分類され、自殺ピルを処方した医師は刑事罰を問われます。私たち協会は、本人意思を尊重した延命措置の中止や不開始を法定化していただきたいと、昨年、国会議員に対して働きかけを行ってまいりました。一部の国会議員が強固に反対しているものの、ブリタニー事件以後、終末期のあり方を議論することがタブーでなくなってきたように思います。

今年こそ、終末期の医療について皆で議論ができる環境を醸成し、医療現場での対応に混乱が起きないよう、法制化を推進したく思います。会員の皆様の積極的なご支援をお願いいたします。

見えない糸、「絆」を大切に

副理事長
鈴木 裕也

除夜の鐘を聴き新年を迎えると、毎年気持ちが改まり、一年の計も簡単に達成できそうな気持ちになります。出来ることなら雲一つない日本晴れで新年を迎え、青空に向かって大声で目標達成を唱えたいものです。暮れには突然の選挙で、法制化議員連盟の議員も入れ替わり再出発となりますが、今年こそは法案成立の実現を願わずにはいられません。

我が家では正月に家族親戚が集まる習慣があります。長男である私の家には独立した子供たちや親族が20人前後集まり皆でお節料理を食べながら正月を祝います。毎年親族が一堂に会して元気な顔を見せ合い、一年を無事に過ごしたことを喜び、さらなる一年の健康を願う楽しい行事です。

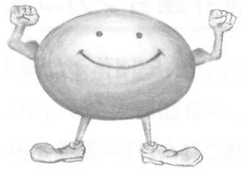
血のつながった人間同士の気持ちには独特のものがあります。「友情」という強い心の結びつきがある一方で、親族間には、それとは別の、何かDNAに仕組まれた特別なものを感じるのは私だけでしょうか。人間にも哺乳類の動物としての本能的な血が流れており、「絆」という目に見えない糸で結ばれ、助け合い、生き続けています。このことを日本の文化として大切にしたいと思っています。

近年、子供たちは就職、結婚で独立することが多いのですが、離れて生活してもDNAに仕組まれた「絆」という目に見えない糸が存在することを忘れないでほしいです。

リビングウイルにおける自己決定権の行使も、親兄弟が納得してあの世に送りだせるような形にしなければ、残された者の心は救われません。自分の命は自分だけのものではありません。私は医師の信条として、患者の命を救えない時には患者と家族の心を救わなければいけないと考え続けてきました。実地医家にもこのことを伝えていきたいと思っています。

人にやさしい良薬、モルフィーくん

副理事長
青木 仁子



僕、モルヒネのマスコットキャラクター「モルフィー」です。2月、協会が名古屋の中日新聞社に依頼して出版予定の『あなたの痛みはとれる』、前後に『モルヒネは鎮痛薬の王者』『「尊厳ある生」のために』がつく長い題名の本の中にいます。

僕のお母さんは、優しい緩和医療のイメージキャラクター「ふうわり」です。僕が皆さんにお会いできることになったきっかけは、協会の青木仁子さんが、僕を手塩にかけ正しく育ててくれた東北支部理事の医師加藤佳子さんと一昨年秋、出会ったことによります。

僕はお二人にしっかり言われています。「あなたの役目は、モルヒネに対する根強い誤解を解くことよ」と。

誤解は、長い戦争の歴史のなかでつくられた「痛みはとれるが、中毒になる怖い薬」と、なぜか「モルヒネはがん末期にしか使えない薬」という二つの流れです。

執筆者は多彩です。長年ペインクリニック一筋の加藤さんには、がんだけでなくそれ以外の病気、症状もモルヒネを使って治療できることを書いてもらいます。緩和医療医師で東海支部理事渡邊正さんには「終末期の痛み以外の症状コントロール」、愛知長寿医療センターの医師西川満則さんには「在宅でも緩和医療ができる」、共同通信記者岩田泰典さんには「厚労省のモルヒネ施策」を紹介してもらいます。

皆さんには「尊厳死の宣言書」第2項が現代医学で実践できることを具体的に示してもらいます。いざの時も心配無用。モルフィーを信頼して下さい。僕は人に優しい「良薬」です。

認知症とLW、ニッポンの道は…

副理事長
長尾 和宏

昨年9月、シカゴで開催された死の権利協会世界連合大会に岩尾總一郎理事長と出席し、私は「日本はLWの法律を持たないが、自宅で平穏死できる国である」という旨の講演をしました。先進国のなかで唯一「LWを担保する法律がない」のに、在宅ホスピスでは誰でも穏やかな最期を迎えることができる不思議な国なのです。

実は2年前にスイス・チューリッヒで開催された世界大会の時に、Dignitasという安楽死組織が運営する「看取りの家」を見学しました。イギリスやドイツで末期がんと診断された人は、自国では安楽死できないので、家族・友人らと遥々ここまで来て、近くの病院で「余命半年」と診断されたらピルを処方されて、それを飲んで死ぬという。

私は、その家を見て「なんてことだ。モッタイナイ!」と思いました。日本ではそんなことをしなくても、誰でも自宅で「尊厳死=平穏死」できる。最期まで自宅で笑って食べて生活できる。しかし欧米人は「尊厳死=平穏死」を知らない。だから安楽死するのだ、と。

さて、今回のシカゴ大会で驚いたことは、安楽死が許されている国・オランダでは、がんのみならず認知症で安楽死する人が増えているという話。自己決定できるのが「自己」なので、認知症で自己決定できなくなればもはや人間じゃない、という考え方なのか。

日本では「たとえ認知症になっても住み慣れた場所で暮らし続けられる町づくり」をスローガンに、「地域包括ケアシステム」が進められているのに。日本の終末期事情は見事にガラパゴス化していますが、いい意味でそうありたいもの。では「ボケた時にLWはどうなるか?」。この根源的な命題は現在、議論中です。私はある程度まではLWを表明できると思っています。昨年は認知症に関する本が2冊出ました。『ばあちゃん、介護施設を間違えたらもっとボケるで!』と『家族よ、ボケと闘うな!』です。よろしければ、ご一読を。

法制化の動き

増子議連会長、法案提出の決意語る

仙台 東北集会に特別出席

仙台市で11月8日開かれた東北支部主催「秋の講演会」に尊厳死法制化を考える議員連盟の増子輝彦会長（民主、参院福島）が特別出席し、議員連盟として「来年（2015年）の通常国会には各党派の党内手続きを終えて、“患者の意思尊重”を盛り込んだ法案を提出したい」と決意を語った。

会場のエルパーク仙台には会員ら150人を超す人が参加。「近づく超高齢・多死時代　備えは万全ですか」をテーマに、東北大学大学院医学系研究科の伊藤道哉講師と元秋田大学医学部長の飯島俊彦精神科医師（共に東北支部理事）の講演を聴いた。

講演に先立ち、急きょ出席した議員連盟の増子会長が挨拶、法制化の現状について次のように話した。

「法案については各党で国会提出のための党内手続きの段階だが、まだ整っていない。手続きを終え何とか新しい年の通常国会（1月～）には提出したいと思っている」「拙速を避け、国会で議論を尽くして成立すればよい」。

仙台で挨拶する増子議連会長

また、ちょうど話題になっている米国・オレゴン州で「安楽死」したメイナードさんのことに触れ、「報道では“尊厳死”とあったが、彼女の場合は明らかに“安楽死”と理解している。尊厳死と安楽死はよく混同されるので、尊厳死議員連盟という名称も法案名に沿った名称に変えるよう内定している」とも話した。

超党派の議員連盟は183名（衆院129、参院54）の国会議員が参加する。11月の衆院解散による総選挙を経て、メンバーが変わることになる。

海外に法制化取り組みを発信

世界連合シカゴ大会で岩尾理事長

24か国、53団体が加盟する「死の権利協会世界連合」の第20回大会が米国シカゴで9月17日から4日間開催された。日本尊厳死協会からは岩尾總一郎理事長と長尾和宏副理事長が出席して「日本の動向」を世界に発信した。

今大会のテーマは多岐にわたったが、各国共通の問題は高齢化にともなう「認知症」で、終末期医療で「アルツハイマー病等認知症患者の尊厳をどう守るか」に関心が集まった。

参加国の国旗が並ぶシカゴ大会

岩尾理事長は「高齢社会日本におけるリビングウイル法制化への取り組み」と題して講演した。日本協会の会員数からみてもリビングウイルを持つのは国民の0.1%と極端に低い。国民の8人に1人が75歳以上という超高齢社会なのに、死の問題をタブー視する国民気質が根強い。そうした日本で「リビングウイル法制化」を進める苦闘を話した。

「在宅と平穏死」は日本文化、長尾副理事長

また長尾副理事長は、日本には国民皆保険制度があり、在宅医療、在宅緩和ケアが広がりつつあるなかで、日本文化に適合するのは「自宅での平穏死」である、と説明した。兵庫県尼崎市のクリニックを中心に在宅看取り活動をする自身のビデオも上映し、日本の平穏死事情をわかりやすく伝えた。

なお、世界連合の役員改選があり、新会長には英国のRon Plummer（ロン・プラマー）氏が就任、岩尾理事長も理事に再任された。世界連合本部は米国からジュネーブ（スイス）に移ることが決まった。

新DVD制作すすむ

「いのちの遺言状～リビングウイル」

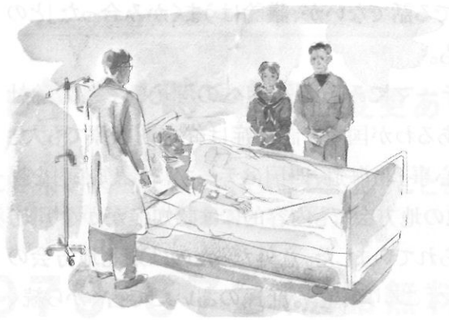
4月完成予定、デジタル紙芝居も入れて

映像で「リビングウイル」を広く知ってもらうと、協会作成の新DVD『いのちの遺言状～リビングウイル（仮）』（30分もの）の制作が進んでいます。医療現場の映像のほか、初の試みとして「デジタル紙芝居」を使い、どの世代にもわかりやすい内容になっています。4月完成予定です。

啓発映像には『自分らしい「生き方」「死に方」を求めて』（2000年、ビデオ版でのちDVD版）がありましたが、この10年間に終末期医療を取り巻く状況が大きく変わりました。「終活」「エンディングノート」などがもてはやされる世の中になり、第2の人生、自分の最期について考える機会が増えました。一人でも多くの方に興味を持ち、理解していただけるよう内容を一新しました。

実際の医療場面は兵庫県尼崎市で在宅看取りにも取り組む「長尾クリニック」（院長・長尾和宏協会副理事長）の活動にカメラが入りました。看護師、介護職員、ケースワーカーの活動をもカメラが追っています。会員さん家族の協力で、「リビングウイルがあったことで、家族での話し合いがスムーズにいき、救われた思いがした」という実際のお話も収録されました。

新DVDにはデジタル紙芝居「ガンコ親父の一生」が入っています。全シーン、水彩画のような柔らかなタッチで描かれた紙芝居のようなアニメーション。仕事に誇りを持つがんこな父。パート仕事をしながら、そんな父を優しく支える母と明るく元気な娘。平凡だけど幸せな3人家族の物語。「いのちの遺言状」も「リビングウイル」も知らなかった家族に突如訪れる「不治の病と死」。残された家族は何を感じたでしょうか。



新DVD作品の販売については会報次号で案内します。

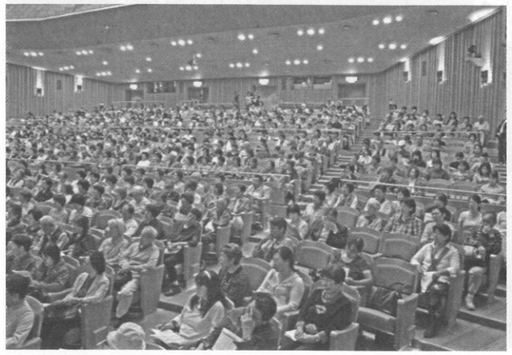
関西支部
支部長 長尾 和宏
住所 〒532-0003 大阪市淀川区宮原4-1-46 新大阪北ビル702号
TEL 06-4866-6365 メール kansai@songenshi-kyokai.com
FAX 06-4866-6375 ホームページ http://www.songen-ks.jp

報告 2014年 関西支部(奈良)講演会 750人が参加

時と場所 10月5日(日)13時～16時半
奈良県文化会館
(国際ホール・小ホール)

講演題目 「おひとりさまの最期」
～家で、ひとりで死ねますか?～

講　師 社会学者 上野 千鶴子さん



当日まで

テーマと講師の魅力に誘われてか、申し込みが殺到。予定の1,100人に達してもなお、申し込みが続きました。ところがあいにく、当日の夜、台風18号が紀伊半島沖を通過するということもあってか、参加者は残念ながら750人にとどまりました。

当　日

国際ホールで、長尾和宏副理事長・関西支部長が挨拶、ついで青木仁子副理事長が挨拶、その後、上野先生の講演に入りました。50枚以上のスライドを使いながら、1時間半、優しい口調で、とても分かりやすくお話を頂きました。多くの事例を紹介しながら、「在宅ひとり死」の現状、問題、新しい動向、今後の期待、そして最後にご自身の死生観まで。(その内容は紙面の都合で、講演要旨としてごく一部しか紹介できないのが残念です)

多くの人から頂いたアンケートからも、大変好評でした。入会申込書も多くの方が持ち帰り入会を検討したいと申し出をいただきました。またその場で申し込まれた方もいらっしゃいました。

講演終了後、会場を小ホールに移して、恒例の懇談会を。250人の皆さんと、上野先生、青木・長尾両副理事長とが向き合っての懇談に入りました。例年と同じく、出席者からは多くの意見・質問が出て、あっという間の1時間でしたが、実りの多い懇談となりました。今年の特徴は、①テーマと講師への関心の強さで関西支部としては最高の出席を頂いたこと　②会員外の方が全体の約8割と非常に多かったことです。

講演要旨

この20年の変化:家族に囲まれながらの大往生は無理。同時に、死という言葉はタブーでなくなった。◆現実の看取りは、病院80%、在宅13%、施設6%。◆国民が選んだ政府は、「ほぼ在宅、時々病院」とベッド数は増やさない、入院期間は短縮。施設の許認可の壁は高く、入居条件は厳しく。そこで、介護難民、死に場所難民が生まれ、最大49万人とも。ここから「在宅」指向となっている。◆「在宅死」の条件:①本人の強い意志。②愛のある、介護力がある家族。③地域に利用可能な介護・医療資源がある。④あとちょっとのおカネ。◆家族がいなくても在宅介護ができる要件:食事・排泄・入浴を支える。そのためには、介護・看護・医療の多職種連携が必要。◆「在宅ひとり死」は可能か:抵抗勢力‥家族、病院しか知らない医師。阻害要件‥施設の作りすぎ。◆そのためのシステム:トータル・ヘルス・プランニング、厚労省の地域包括ケアシステムなど。それを事業化したのが「ホームホスピス」…全国的に増えてきている。◆一人でも、誰もが安心できるシステム…居住・介護・医療の複合施設が必要。新しい動きも。◆私の死生観:死ぬときは何でもあり、理想的な死に方なんてない。生きるところを選べないし、死に方も選べない。最後まで生き抜けばよい。

(文責:小澤和夫)

「第2回サロン交流会」便り

「…もっと勉強したい…」

支部理事 西口　英雄

■平成26年7月29日(火)14時～16時に実施。参加者は会員9人(他に支部理事2人)。

■テーマは「人生は空の旅に似ている」。このテーマは出前講座の導入部分でよく使う内容で、空の旅(航空機)の事故は離着時に多く、特に着陸時に多い。人生も着陸時(最終段階)でのトラブルが多く、安全に軟着陸(平穏死)するためには、家族の理解を得たリビング・ウイルと延命治療、緩和ケアの知識、かかりつけ医の協力等が必要だという内容です。

■私は出前講座では情報を一方通行で伝えるのではなく、言葉の意味と関連付は白板を使って丁寧に説明し、統計数値は出来るだけカラーグラフの図を使って参加者の視覚に訴え、参加者との会話を大切にしながら進めていくようにしています。

■簡単な自己紹介のあとは、にぎやかな意義のある交歓会となりました。

■参加者の感想

<80歳代>　お話有意義でした。有難うございました。個人的な課題を抱えております。勉強させていただきます

<同>　とても参考になりました。終末期の軟着陸のためにこのような機会に参加させていただきたいと思いました。「かかりつけ医」をと思い悩んでいます。探しています。ありがとうございました。

<70歳代>　いろいろのお話聞けて参考になる事も。ありがとうございました。

<同>　尊厳死の問題はとてもむずかしいとおもいました。色々な考え方がおられるのを知りびっくりしました。お話よくわかり、実践したいと思いました。ありがとうございました。

<同>　初めて参加させて頂きました。出席されていた方それぞれ同じ様な思いで御自分の終末期を考えていらっしゃるのだと実感致しました。今後もサロンに出席させて頂きながら、自分自身も含めて勉強していきたいと思っています。ありがとうございました。

<60歳代>　「介護との関係を含めて終末期を考えるべきだと思う。まだまだ知識を深める必要があると思った」

<同>　知りたいと思っていたことを聞くことが出来ました。これから出てくると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

■第4回のサロン交流会は平成27年1月27日(火)です。詳細は下記支部ニュースで。

支部ニュース

第4回サロン交流会のご案内

交流、気付きの絶好の場です。

日時 1月27日(火)　14時～16時

テーマ 「人間らしい生と死のかたち」
～エンディングノートの書き方、
書く意味(リビング・ウイル)～

場所 支部事務所

話題提供者 支部理事　竹内 奉正

申込制 定員15名。友人(特に非会員の方)と一緒大歓迎です。1月5日(月)～15日(木)受付。電話、FAX、又はメールでお申込み下さい。

2 「定例サロン」のご案内

毎週火曜日13時～16時事務所で。当番の支部理事が出務していますので、お気軽に相談等やおしゃべりにお越し下さい。

3 出前講座に講師を派遣します

尊厳死、リビング・ウイルに関する内容を知りたいというご希望のある方、グループ(団体)でお申込み下さい。費用等を含めてご相談に応じます。一度、お電話を下さい。

4 関西支部サポーターを若干名募集しています

現在5名の方が活躍中です。サポーターの内容は支部の各種行事(出前講座、講演会、運営会議)や広報のサポートです。ご希望の方は支部事務所にお問い合わせ下さい。